井上雅晴　1980 年　筑波大学卒

スーパーアンチ誕生秘話

現在私は母校である日本大学三島高等学校で保健体育の教員をしています。日本大学はありがたいことに 65 歳定年制ですので来年 3 月で定年を迎え、間を開けずに年金生活に入ることができる幸せ者です。

山形県米沢第二中学校入学と同時に卓球を始め、先輩から長距離走が速いという良く分からない理由で強制的にカットマンにさせられました。鬼のような佐藤敏夫先生（「さとうとしお」なので「調味料」と呼んでいました）の厳しい指導の下、カットマンとしてそこそこ上達することができました。中学３年生ににになってすぐに静岡県御殿場市にある原里中学に転校しましたが、卓球が物凄く弱く、校長先生の許可を得て御殿場南高校に練習に行かせて頂いていました。８月に顧問の清水洋二先生が OB である東京教育大学（筑波大学）卓球部の合宿が行われ、運よくその合宿に参加させていただいたこともあり、静岡県大会でベスト８に入ることができ、日大三島高校に特待生として入学することができました。日大三島高校時代、インターハイには２年生ではシングルスで、３年生ではダブルス・シングルスで出場することができましたが共に２回戦で敗退でした。しかし、その３年生のインターハイでは全く予測していない事が起きました。全く無名であった同僚の斎藤・前川ペアがなんと優勝し、三島駅前から学校まで優勝パレードが行われたのです。私は正直、仲間の快挙を心から喜ぶ寛大さを持ち合わせてはいなく、「大学ではこいつらを超えてやろう！」と心に誓ったのです。

私は縁があった筑波大学に入学することができました。しかし、全ての授業に出席し１７時からの練習では、私にとって大幅な練習量減となりました。これが理由ではないとは思いますが、全く勝てない時期が１年以上続きました（唯一、瀬木明先輩と組んで出場した全国国公立大学大会でのダブルスで３位に入賞できました)。「少ない練習時間でも何か工夫して上達できないだろうか？」こればかりを考えていました。ある時、ふと思いついたのが、『アンチスピンラバーの改良』でした。その当時、関東の大学生の間で、卓球メーカーに「特注ラケットやラバー」を注文することが流行っていました。２年前にバタフライから『アンチスピン』というラバーが発売されていましたが、スポンジとシートともに固く『カチン！』という音がしてボールが滑り完全な無回転のツッツキしかできませんでした。私は、試行錯誤の上、少し摩擦がかかるような柔らかシートと当時「フェイント」という粒高ラバーに使用していた柔らかいスポンジをさらにスカスカにしてもらいルールギリギリまで厚くした、スポンジの組み合わせを完成させました。これがカチンという音の出ない軌道も裏ソフトとあまり変わらないナックボールが出せる『音が出ない特注アンチラバー』です。作成を依頼したのはバタフライの辻勧則さんという方でした。

このラバーがその後世界卓球界のルールを変えることになるとは夢にも思いませんでした。

私はそのラバーを貼ったラケットを手に、単独で日本大学に練習に行き、今まで一度も勝ったことがない坂本憲一選手に楽勝することができました。彼は首をかしげてばかりでした。サーブとツッツキが切れているか切れてないか全く分からないというのです。それは当然です。当時のラバーの色はルール上、何色でも良かったため、フォア面黒・バック面黒を使用し、ラリー中もラケットをクルクル持ち替えていたのですから。

この魔法のラバーをダブルスのパートナーである１年後輩のカットマンの大橋広巳君も欲しがり

ました。複数枚注文していたので、心優しい私は彼にプレゼントし、関東学生選手権に出場しました。この大会では、誰も魔法のラバーの存在を知りません。ダブルスでは、高校の同級生でインターハイダブルスで優勝し、専修大学に進学した斎藤政則君のペアに勝ちベスト８に入ることができました。ダブルスではありましたが、ものすごく嬉しかったです。ライバルの彼に勝つために卓球を続けていたようなものでしたから。しかし、シングルスではランク決定戦で IH 三冠王の早稲田大学の松井さんに敗れてしまいました。序盤はツッツキの変化でリードしましたが、表ソフトの松井さんは予想以上に賢かったです。ロングサーブしか出さずにツッツキはほとんどやらず、カット打ちは回転をかけずに角度打ちを行うという作戦に転じ、逆転負けをしたのです。

一方、ダブルスのパートナーの大橋君はツッツキからのドライブを多用する日大のエース中村安孝さんに魔法のラバーが効きまくり、大番狂わせの勝利を収め、シングルスでもベスト８に入る快挙を成し遂げ、「卓球レポート」にも大きく取り上げられました。この結果、法政大学の芦葉君を初め数名のカットマンが大橋君に「そのラバーはどうしたら手に入れることができるのか？」と問うと彼は「バタフライの辻さんという方に筑波大の井上さんと同じラバーと作ってくれ、と依頼すれば良い」と答えていたのです。それから関東の大学生カットマンは全員このラバーを使い始めました。バタフライの辻さんは当然商品化しました。

その後は皆さんご存知のように『スーパーアンチ』は世界中に広まり、カットマンならずと、当時世界のトップレベルのハンガリーのヨニエルやクランパ、中国の蔡振華選手などが使用するに至りました。恐らく、「スーパーアンチ」売り上げは何兆円に上ったことでしょう。

しかし、当時ヨーロッパではプロのクラブチームの卓球が盛んになりつつある時期で、見て楽しむ卓球が要求されていました。観衆にとっては、以前に比べて全くラリーが続かなくなり、またなぜミスをしたのか見ただけではが分からない卓球がつまらなくなり、ファン離れが始まりました。このままでは卓球の発展に大きな支障をきたすという事で、世界卓球連盟は「両面にラバーを張る場合は異色とする」というルール改正を行ったのです。その後「赤と黒に限定」から現在のルールになっています。

何故、私が考案した『音が出ない特注アンチラバー』で特許を取っても儲けなかったのか、という質問を受けることがあります。私は元々あったアンチラバーを改良しただけなので「特許」ではなく「意匠」となるようです。もしかしたら、後々バタフライから改めて御礼があるのかな？と思ったりしたことがありました。今から２０年ほど前に筑波大学の後輩である小黒裕君に晩年の辻勧則さんに「この方がスーパーアンチを考案した人ですよ」と紹介して頂いたことがありました。「あーそうだったかな。勘違いしておった。わしが開発したと思っていた。そのうち世の中に紹介するからな。」という言葉を頂き、御礼は一生あり得ないなと思いました。（辻さんはその数年後に亡くなりました。）

現在、私は母校の日大三島高校で教頭をしております。有り難いことに４０年以上母校の卓球部の監督を務めることができました。６５歳の定年まで後、半年です。もし、２０歳代の若いころ、スーパーアンチの爆売れにより何某かの大金が私の懐に入っていたとしたら何かの事業や不動産などに手を出し、その後のバブル崩壊で自殺でもしていたかもしれないと思うと、バタフライの辻さんに感謝をしなければならないかな、とも思います。

最後に、全国国公立大学大会ではダブルスで一度だけ優勝しました。パートナーはもちろん大橋君です。

以上